



The Chandelier6, 2018, 130x160cm, Archival inkjet print

The Chandelier 6

2015年から植民地朝鮮・大田に生きた日本人を中心に調査し集めてきたアーカイブの記録や写真などの作品を紹介する。映像、写真、資料、ドローイングなど約10数点を展示する。

企画：ベ サンスン

主催：一般社団法人リビング・モンタージュ

共催：Oharano Studio gallery [<https://www.oharanostudio.com>]

ベ サンスン [裴相順 Bae Sangsun] リサーチプロジェクト展示&上映会

展示作品《シャンデリア》シリーズは、富や権力の象徴ではなく、国家の歴史から忘却された植民地支配の記憶を、かすかな明かりで照らし出す。一評論の一部から

高嶋 慈 (美術評論家)

文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業

2021年12月25日 - 27日
OPEN 12:00 - 17:00

トークイベント&映像上映会
12月26日 14:00 - 16:00

映像作品 [25分23秒]

蘇堤鐵道官舎5 3号 - 萩元兄弟ストーリー

トークイベント 「記憶をかたどる」

語り手：ベ サンスン / 聞き手：尾角朋子



展示概要

- 展示期間 -

2021年12月25日 - 27日

OPEN 12:00 - 17:00

- 展示会場 -

〒610-1153

京都市西京区大原野南春日町544-26

Ohatano Studio gallery

- 入場料金 -

料金 500円 ※その他写真やカタログ販売

- 展示内容 -

写真作品、リサーチ資料、ビデオ上映

ベ サンスン [裴相順 Bae Sangsun]

1997年成均館大学美術教育科(美術教育専攻)卒業。2002年武蔵野美術大学造形研究科美術専攻修了。2003年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(版画専攻)交換留学生。2008年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士(後期)課程満期退学。2005年と2008年には、日本の「現代美術の展望-新たな平面の作家たち」VOCA展示に選ばれ、韓国と日本を始め、多くの国際的な展示に参加した。現在は京都を拠点に制作し、活動している。

「シャンデリア」シリーズ

韓国、日本産の糸と京都の金銀糸からなる約10数色の多様な色の糸束をほどき、絡まりもつれ合った状態を写真として制作した。平均年齢80歳で激動の日韓近代史を生きてきた各個人のストーリーに耳を傾け、その中に残っている記憶のかけらを集めた。彼らのストーリーに光を当てるための作業だ。特に日韓近代史、戦争、終戦の過程を経た70年余りの旅程の中に絡まり合った話の糸束は、どこからが始まりで、どこが終わりなのか分からない。それらの破片に記憶のかけらを解き放した作品である。富と権力の象徴であるシャンデリアとは全く異なる立場で生きてきた人々のストーリーを展示、共有したいと思う。

リサーチプロジェクト概要

大田でのリサーチ：忘却された日韓の近現代史に向かう眼差し

裴は2015年から、日韓の近現代史において忘却されてきた記憶のリサーチを開始する。裴が着目したのは、1900年代初め、日露戦争に備えて、朝鮮半島を横断する京釜線の鉄道建設の重要な中継地点として日本人が作った街、大田(テジョン)である。当時の絵ハガキの写真には、近代的な駅舎や、日本語の看板が並ぶ日本風の街並みを行き交う和装の人々が写る。だが敗戦後、日本人は本土に引き揚げ、近代建築物の多くは朝鮮戦争で破壊された。大田駅の裏側には、日本人の鉄道技術者とその家族が住んだ官舎が集まる蘇堤洞(ソジェドン)が唯一残っていたが、近年の再開発で姿を消しつつある。裴は、記録資料の収集と大田出身の高齢の日本人へのインタビューを元に、作品を精力的に制作している。写真作品《シャンデリア》シリーズでは、韓国と日本のカラフルな錦糸が絡まり合い、暗闇に浮かび上がる。それは、戦前に大田で生まれ育ち、敗戦後に日本に引き揚げた後は、差別を恐れて朝鮮半島出身であることを家族にも語らずに生きてきた人々の人生を思わせる。また、大田に移住し、行き交い、去っていった人々の人生の軌跡の交錯も連想させる。さらにそれは、複雑な両国の歴史のメタファーでもあり、帝国主義的な欲望の膨張をも思わせる。こうした多層的な意味やメタファーが重なり合い、一義的な意味を決定できない点に、《シャンデリア》シリーズの意義がある。それは、富や権力の象徴ではなく、国家の歴史から忘却された植民地支配の記憶を、かすかな明かりで照らし出す。裴は、大田と同じく近代都市形成に日本人が深く関わった釜山でもリサーチを行なった。かつての日本人街に残る1本の街路樹を撮影し、深い森のようなイメージを合成した作品では、ベルベット・ペインティングの「レイヤー構造」が、歴史への眼差しに変換される。また、裴は、大田出身の高齢者たちのポートレート写真も制作している。彼らは、植民者・支配者でありつつ、敗戦によって故郷から強制的に隔てられ、かつそのことを隠して生きてきたという点では被害者でもある。被占領者側からの糾弾する視点のみ立つのではなく、「狭間で生きた人々」に焦点を当てる裴の視線は、20年間以上日本に在住して2つの視点を持つ彼女だからこそ可能になったといえる。その姿勢は、アートを通してポストコロナルを考えるうえで示唆に富む。こうしたリサーチベースの作品群に共通するのは、メタファーを用いて歴史的痕跡を変換し、言語による歴史記述よりもより微妙で複雑な方法によって、現在の状況の複雑さの根として近代史を捉え直す姿勢である。裴の作品は、成熟した絵画制作のアプローチを取り込み、内省的な世界と歴史の深部を往還しながら、アートの可能性について示している。

— 評論の一部から

高嶋 慈 (美術評論家)

お問い合わせ

文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業

企画：ベ サンスン

主催：一般社団法人リビング・モニタージュ

共催：Oharano Studio gallery [<https://www.oharanostudio.com>]

〒610-1153 京都市西京区大原野南春日町544-26

TEL : 080-6128-9609 / MAIL : oharanostudio@gmail.com